

小豆沢病院附属本蓮沼診療所

在宅で癌の末期患者さんたちを、生活を支えて10年

往診医 成瀬義夫

往診専門の本蓮沼診療所が小豆沢病院付属の往診診療所として誕生してから10年たちました。リハビリ内科の矢田先生、消化器(肝臓)内科の石川先生、呼吸器内科の井上先生などと一緒に始めたわけですが、消化器外科と麻酔科の成瀬ができることは何かと考え、癌の末期患者さんを在宅で支えることならできるかも、と思って往診診療所に参加したのです。

始めてみると、癌の末期ばかりではなく脳梗塞の後遺症、認知症のお年寄り、神経難病の方、頸椎損傷の方など、専門外の方も数多く、手探りしながら進んできた10年だったかと思えます。内科の諸先生や訪問看護師、ケースワーカーやヘルパーのみなさん、そして何より家族のみなさんなど多くの方に支えられ、なんとかやってくることができたのだと感謝しております。

さて、癌の患者さんについてだけでも少しまとめてみようと思立ち、職員の協力で開設以来の全ての症例数を出しました(表①参照)。



(表①)

疾患名	件数
胃がん	33
大腸がん	22
肺がん	29
肝臓がん	16
すい臓がん	8
乳がん	9
食道がん	9
前立腺がん	5
胆道系がん	7
子宮がん	2
卵巣がん	2
脳腫瘍	3
腎臓がん	1
膀胱がん	1
悪性リンパ腫	1
その他	2
合計	152件

予想以上に多くの癌の患者さんを在宅でみてきたなと思えます。ただし、本当の意味での末期の方は48名、そのうち在宅末期の保険算定できた方は43名でした。

幸い、最後まで安楽に過ごせて、ご家族に大変感謝された人もいますし、認知症がひどくて生活そのものを支えるのに四苦八苦した方もいました。特に老々介護や独居など、介護力の弱い家庭で在宅末期を支えるのは大変でしたし、多くは最後に病院のお世話になったかと思えます。それでも、一時期でも気楽に暮らせる自宅で、家族と最後の一時期を過ごすことは、何にも変えがたい貴重な時間なんだと教えられました。

過去5年間の疼痛コントロールについても、についてまとめてみました(表②参照)。その他の手段として、在宅酸素法(HOT)13件、在宅IVH12件、PEG/PEJ1件、サンドスタチン持続皮下注1件など、いろいろな手段をとり疼痛の緩和に努めました。特に骨転移の患者さんの疼痛緩和には苦労しましたが、放射線照射を依頼するなど、診療所だけの対応で済ませないように工夫し、症状によっては小豆沢病院にも入院依頼をして、在宅末期をささえることができたと思っています。

(表②)

疼痛コントロール内容	件数
MSコンチンの内服	8
デュロテップパッチ	12
オキシコンチン内服	2
アンペック座薬など	11
レベタン座薬	4
オブソ、塩モヒなど	6
合計	32件

48名の末期癌の患者さんが最期をむかえた所は、病院31名(うち小豆沢病院26名)、在宅17名でした。なによりも24時間体制維のためには、診療所の看護職員、病院の若手医師たちの協力なくてはできなかったわけで、本当に感謝しています。これからも微力ながら、地域の在宅医療を支えるために奮闘していく決意ですのでご支援をよろしく願います。